

[実践・事例報告]

人々の暮らしを理解する実習の成果と課題

明野 聖子, 川添 恵理子, 田中 裕子, 増田 悠佑, 表山 知里, 竹生 礼子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

キーワード

新カリキュラム, 看護, 統合実習, 成果, 課題

I. はじめに

看護基礎教育では、2020年10月に保健師助産師看護師学校養成所指定規則および「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」が一部改正され（厚生労働省、2019）、2022年度から改正カリキュラムが適用された。少子高齢化が進行の一途をたどる中、地域包括ケアシステムの推進に向け、人口および疾病構造の変化に応じた適切な医療提供体制の整備が必要とされている。看護職の就業場所は、医療機関に限らず在宅や施設等へ広がっており、多様な場において、多職種と連携し適切な保健・医療・福祉を提供することが期待される（厚生労働省、2020）。そのため、患者の多様性・複雑性に対応した看護を創造する能力がより一層求められている。

このような現状を踏まえ、本学科では、2022（令和4）年度から、地域で暮らす人々を理解し、多様な場で活躍する看護職を養成するための新カリキュラムがスタートした。新カリキュラムでは、統合実習の位置づけで、1年次の後期に、人々の暮らしを理解する実習（以下、本実習）を導入した。

本研究の目的は、本実習に対する学生の評価を明らかにすることにより、実習の成果と今後の課題を検討することである。

II. 実習の概要

1. 実習のねらいと実習目的・目標

本実習のねらいは、暮らしの場を問わず、あらゆる健康状態の人々に対する看護をシームレスに創造する力を培うこととした。実習の目的は、地域の人々との交流を通して、人々の多様な暮らしの場における人々の生活を理解するために必要な視点について学ぶことである。

実習の目標は、1) 看護の初学時に地域の人々と交流することにより、高い倫理観と豊かな人間性をベースにしたケアマインドを身につける、2) 対人援助に必要な信頼関係を築くために必要なコミュニケーション能力を高めることができる、3) 人々の多様な生活、地域の環境、価値観、歴史にふれ、人々の生活を理解するために必要な視点を幅広く学ぶ、の3点とした。

2. 実習期間および実習協力機関・組織

本実習の期間は、夏季実習として8月に5日間、冬季実習として2月に5日間、計10日である。実習協力機関・組織は、2自治体内の5つの機関・組織であった。

3. 実習プログラム

実習の概要を表1に示した。主なプログラムは①地

表1 実習の概要

実習先	A市		B町	
	まちづくりセンター	ケアセンター	高齢者クラブ	町内会 社会福祉事業所
実習前	実習オリエンテーション 実習の目的・目標、プログラム、評価方法、記録、感染予防対策など			
Day 1	・講義、事前課題の共有 ・地区踏査	暮らしとは、自分の暮らしを振り返る 地区踏査の計画、歴史や文化、地域環境を観察する		
Day 2	・地域の話聞く	地域の歴史、まちの様子、地域の人々の暮らし、暮らしや地域に対する思いなど		
Day 3	・暮らしの話聞く	暮らしの様子、生きてきた暮らしの歴史、暮らしや健康に対する思い・価値観など * いずれもグループ単位での実施を主とする 話を聞きたい内容の整理、体験した内容の振り返り、学びの共有など		
Day 4	実習報告会 準備			
Day 5	実習報告会・ディスカッション			

<連絡先>

明野 聖子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

E-mail:naga-s@hoku-iryu-u.ac.jp

区踏査, ②地域の人々による講話, ③暮らしの話を聞くインタビュー, ④実習報告会およびディスカッションにより構成した。

III. 研究方法

1. 対象者

2022年度の夏季および冬季の実習を履修した看護学科1年生118名を対象とした。

2. 調査方法

冬季の実習終了後の2023年2月17日に, 本実習に対するアンケートとして, Google Formsを使用した無記名自記式のアンケート調査を実施した。学生には, Google Classroomを用いて, アンケートへの回答を依頼した。

3. 調査項目

1) 実習内容の評価

実習内容の評価は, (1) 価値のある実習だった, (2) 看護分野や関連する分野への関心が広がる実習だった, の2項目を設け, 「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の4段階で尋ねた。

2) 実習を通じて達成・修得した事柄

実習を通じて達成・修得した事柄は, (1) 実習の目的・目標を達成できた, (2) 実習前と比べて他者とのコミュニケーション能力がついた, (3) 実習前と比べてグループで活動する力が養われた, の3項目とし, 「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の4段階により回答で尋ねた。

3) 実習を通じて得た思い

実習を通じて得られた学生自身の思いについて, (1) 新しい知識, 考え方, 技能を習得でき, さらに勉強したくなった, (2) 地域に出向いて学習することが楽しいと感じられた, (3) 人の暮らしを知ることが大切だと感じられた, (4) 他者(住民など)と交流することが楽しいと感じられた, (5) グループで活動することが楽しいと感じられた, の5項目とし, 「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の4段階で尋ねた。

4) 実習プログラムや教材の適切性

実習プログラムや教材の適切性は, (1) 実習プログラムの内容や構成は適切だった, (2) 実習プログラム

の時間配分は適切だった, (3) 事前課題等, 実習前の準備は適切だった, (4) オリエンテーションの時期や内容は適切だった, (5) テキスト, 講義資料, オンデマンド動画等の教材は適切だった, の5項目とし, 「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の4段階で尋ねた。

5) ワークシートの適切性

ワークシートは, (1) 記載しやすかった, (2) 記載する時間は十分あった, (3) 内容は実習目標を達成するために効果的だった, の3項目を設け, 「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の4段階で尋ねた。

6) 実習をより良く実施するための改善点

実習をより良く実施するための改善点は, 回答を必須に設定し, 自由記載で尋ねた。

7) 実習の感想・意見

実習に対する感想・意見について, 任意の回答項目として設定し, 自由記載により回答を求めた。

4. 分析方法

調査項目1)~5)は, 4段階評価で得た回答を単純集計した。調査項目6)と7)は, 自由記載で得た回答をもとに, 類似する内容をまとめて, カテゴリー名を付けた。

5. 倫理的配慮

アンケートは無記名とし, 自由意思による回答であること, 協力の有無は成績評価には影響しないこと, 調査結果は公表される可能性があることについて, 文書および口頭により説明した。本調査への回答をもって, 調査への同意とみなした。なお, 利益相反に関わる開示事項はない。

III. 結果

対象者118名のうち, 回答が得られた112名(回収率91.8%)を分析対象とした。

1) 実習内容の評価

実習内容の評価は, 「価値のある実習だった」, 「看護分野や関連する分野への関心が広がる実習だった」のいずれにおいても, 107名(95.5%)が「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した(表2)。

表2 実習内容の評価

N=112				
項目	とてもそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう思わない
価値のある実習だった	83 (74.1)	24 (21.4)	3 (2.7)	2 (1.8)
看護分野や関連する分野への関心が広がる実習だった	78 (69.6)	29 (25.9)	3 (2.7)	2 (1.8)

2) 実習を通じて達成・修得した事柄

実習を通じて達成・修得した事柄は、「実習の目的・目標を達成できた」と「実習前と比べてグループで活動する力が養われた」の2項目で110名(98.2%)の学生が「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した(図1)。また、「実習前と比べて他者とのコミュニケーション能力がついた」は、108名(96.4%)の学生が「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した(図1)。

3) 実習を通じて得た思い

実習を通じて得た思いは、「人の暮らしを知ることが大切だと感じられた」の1項目については、111名(99.1%)のが「とてもそう思う」もしくは「そう思う」

と回答した(図2)。また、「新しい知識、考え方、技能を習得でき、さらに勉強したくなった」や「グループで活動することが楽しいと感じられた」の項目では109名(97.3%)、「他者(住民など)の他者と交流することが楽しいと感じられた」や「地域に向いて学習することが楽しいと感じられた」という項目においても、107名(95.5%)以上の学生が「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した(図2)。

4) 実習プログラムや教材の適切性

実習プログラムや教材の適切性は、「事前課題など、実習前の準備は適切だった」や「テキスト、講義資料、オンデマンド動画等の教材は適切だった」の2項目で108名(96.4%)、「実習プログラムの内容や構成は適

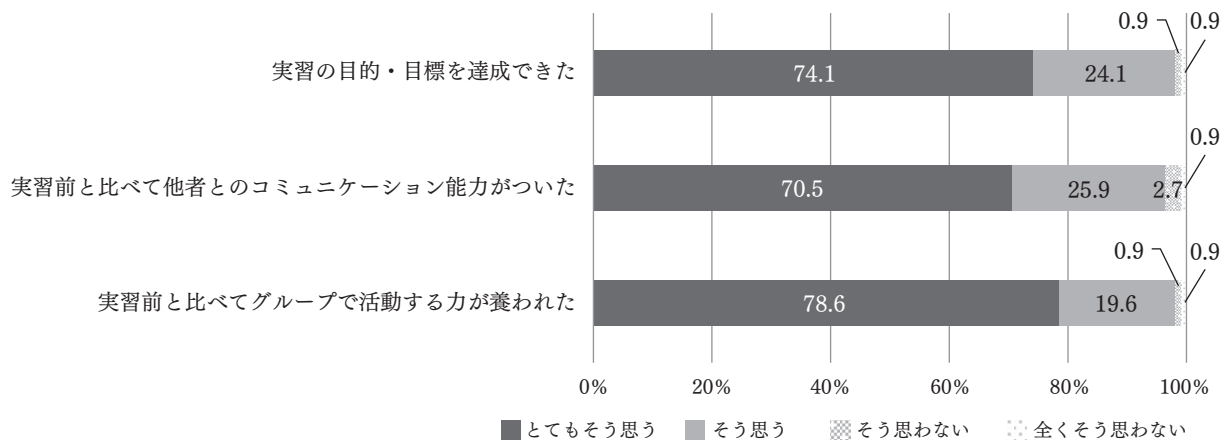


図1 実習を通じて達成・修得した事柄

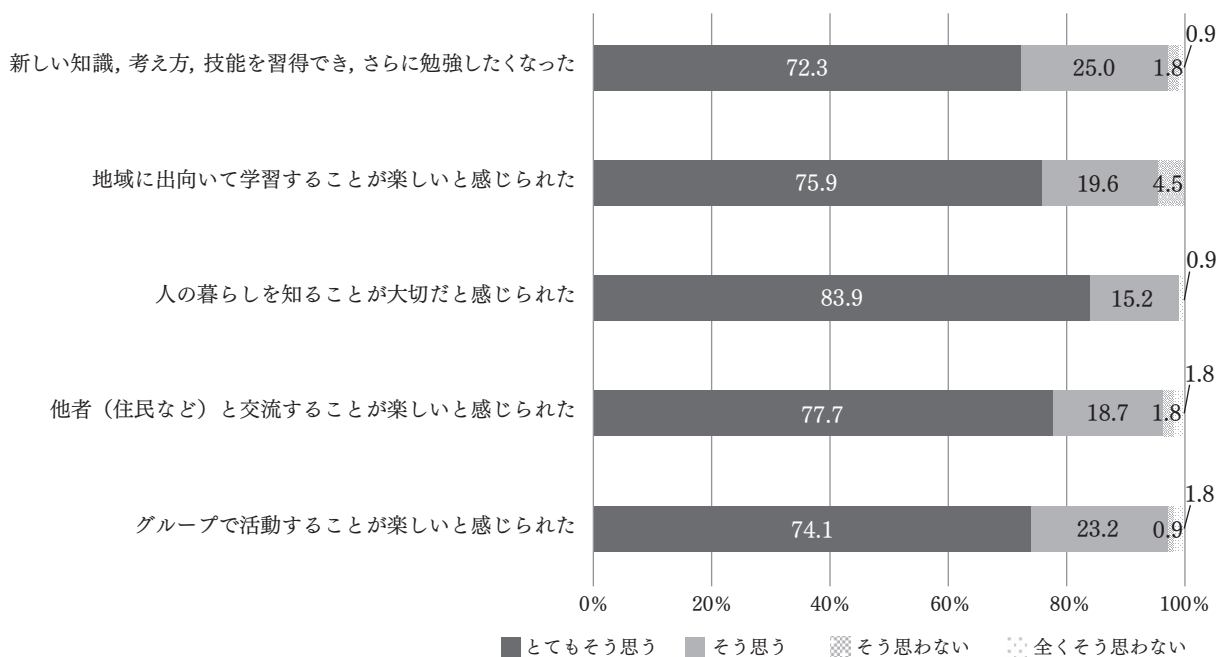


図2 実習を通じて得た思い

切だった」は105名（93.8%）が「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した（図3）。一方で、「オリエンテーションの時期や内容は適切だった」や「実習プログラムの時間配分は適切だった」の2項目で、「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した学生は96名（85.7%）であった（図3）。

5) ワークシートの適切性

ワークシートの適切性は、「内容は実習目標を達成するために効果的だった」は107名（95.5%）、「記載する時間は十分あった」は103名（92%）が「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した（図4）。一方で、「記載しやすかった」と回答した学生は94名

（84%）であった（図4）。

6) 実習をより良く実施するための改善点

実習の改善点について、自由記載で回答を求めた結果を表3に示した。「色々な地域で実習を行って違った視点で捉えてみたい」、「地域の方の話をもっと聞きたい」、「話し合う内容を具体的に説明してほしい」、「報告会後のディスカッションは違うグループと意見交換したい」、「時間配分を見直してほしい」、「実習エリアや実習内容にあわせたワークシートだと書きやすい」、「ワークシートに書く内容を具体的に示してほしい」といった記載があった。

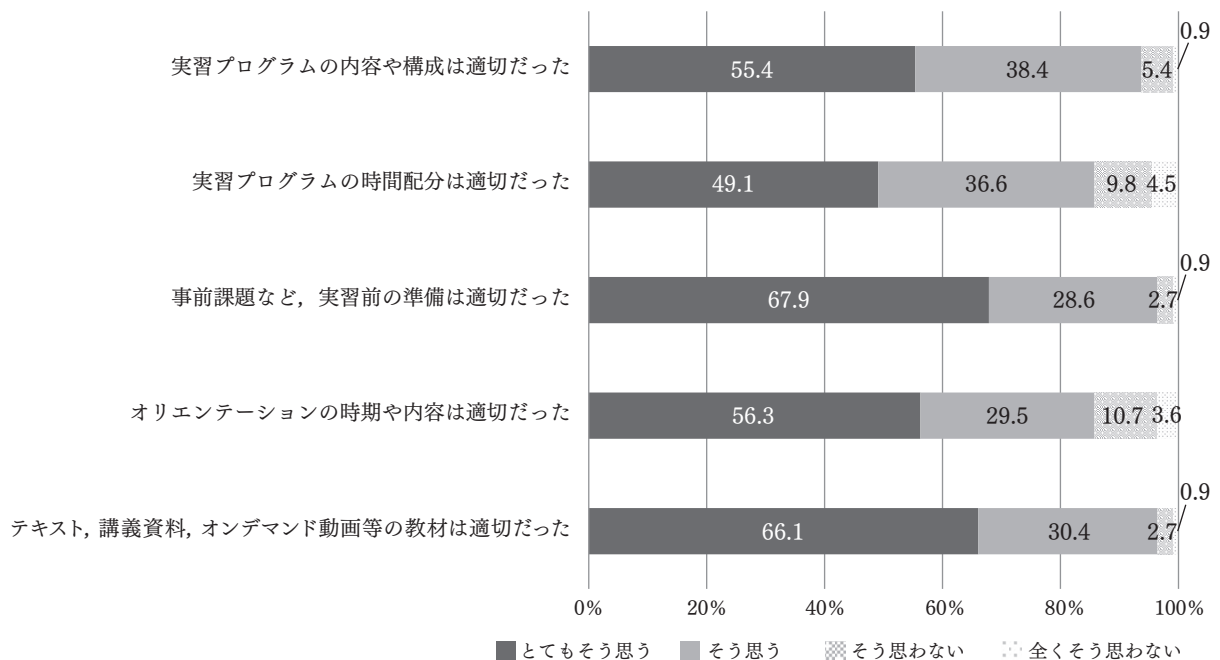


図3 実習プログラムや教材の適切性

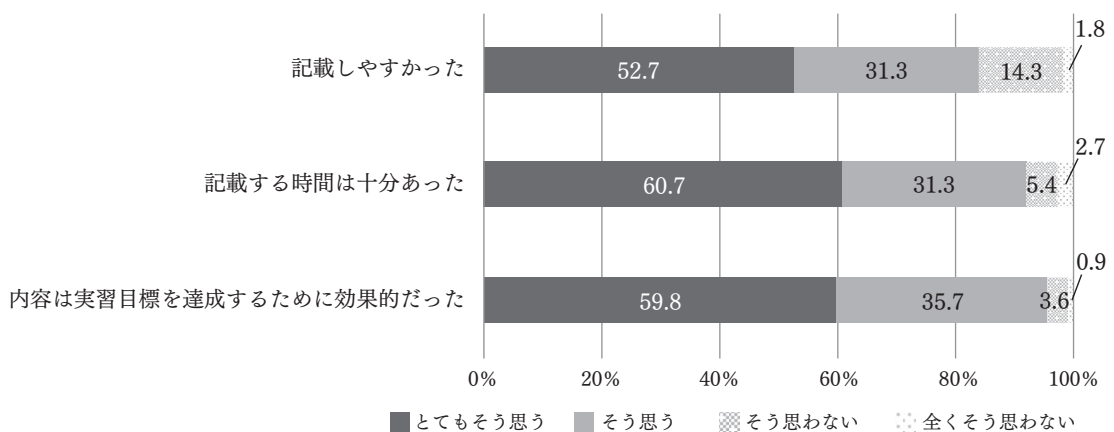


図4 ワークシートの適切性

表3 実習をより良く実施するための改善点

カテゴリー名	記載内容の例	
実習全体	看護に関連することを学びたかった 看護の知識も関連づけて交流したかった	看護に関連することをもっと学びたかった。 もう少し看護に対する知識も関連づけて地域の方々と交流することができれば、看護大学としてより良い実習になると感じた。
	色んな地域で実習を行って違った視点で捉えてみたい	もっと色々な地域で実習を行えると新たな発見ができそうだった。 A市内に実習に行くグループを作るのであれば、C地区、D地区、A駅周辺なども実習グループに増やすべき。今年のままA市内、B町で実習場所を分けるのであれば、学生が住んでる地域でグループを分けない方が違った視線から捉えることができると思う。
	プログラムに関すること	
地区踏査	夏と冬で同じ地域を地区踏査すると比較しやすい	夏と冬で地区踏査の場所が違うグループがあったため、同じだと比較しやすいと感じた。
	自分の実習エリア以外の地域にも行くのと違う気づきを得られる	地区踏査に関しても訪問先の地区だけではなく、自分が担当ではないエリアも実際に行くと自分の目で街の様子を確認してみたいと思った。
	地区踏査は教員も着いていると安心	地区踏査の時は、教員も着いていると安心。
人々の話を聞く	地域の方の話をもっと聞きたい	5日間の実習に対して、地域の方と出会えるのが1日(2時間程度)しかなかったのもっと他の方々の人々の暮らしについてのお話が聞きたかった。 夏と冬で同じ人から話を聞くのではなく、違う人から話を聞くことで、より地域についてや違った価値観について学べると思う。
	柔軟な対話ができるような準備をしたい	地域住民さんとの対話の事前準備では、時間配分は決めずに質問の内容だけ準備する形にした方が、柔軟な対話ができると思った。
グループワーク	話し合いの時間を増やすとより深い気づきにつながる	話し合いの時間ももっと欲しいと思いました。そうすることでより深い自分ない気づきにつながると思った。
	話し合う内容を具体的に説明してほしい	グループワークの内容で説明がわからない時があったので、どういことを話すのか具体的に話してもらえると良かった。
	グループの進行状況にあわせて何をするか決めたい	グループワークはグループごとに学習にかかる時間が異なるので、基本的にそのグループの進行状況に合わせてメンバーたちが何をするか決めるようにした方が良かった。
報告会	発表準備の時間が短かった	発表準備の時間が短すぎると感じた。
	報告会後のディスカッションは違うグループと意見交換したい	報告会の発表を聞いたことがないグループとのディスカッションだと新たに意見交換を行い、しっかりとディスカッションになると思う。
	暮らしと健康というテーマの他にも話し合いたい	暮らしと健康という同じテーマについて何回も考えたので、もう少し違うことについても話し合ってみよう。
実習運営に関すること	実習内容	グループによって実習内容に差が大きい 実習先によって実習内容に差があるように感じられた。 また内容も差が大きいので近い内容のものにしたほうが良いと思った。
	時間配分	時間配分を見直してほしい 時間が余ることが多かった もっときちんと段取りだったりを決めた方が良かった気がする。 各グループの終了時間は揃えた方がよい 終了時間は各グループ揃えた方がよいと思った。
実習時の移動	移動手段を整えてほしい	実習場所への移動が大変だったので移動手段を整えて欲しい。
	悪天候時の対応を考えた方がよい	遠い地域だったので大雨や雪の時はオンラインにした方が良かったと思った。
実習にかかる自己負担	グループによって実習にかかる自己負担の費用が異なる	グループによって実習にかかる自己負担の費用が異なる点も改善した方が良かったと思った。
	ワークシート	地域によって、ワークシートを変えていただけたら書きやすいと思った。 冬の地域の方々から聞いた話を書くワークシートでは話してもらった内容にそってワークシートを作るべき。 実習の活動をする際にワークシートを記入したが、もう少し具体的なテーマにした方が、話しやすくて考えも深まると思った。 ワークシートに記入例などがあると、こういった内容を書けばいいか理解しやすく助かると思う。 ワークシートにメモの欄を作ってほしい ワークシートにメモの欄を作っていただくといいと思った。 ワークシートを記入する時間がもう少しほしい 記入をする時間が少なかったのもう少し時間があると嬉しい。
改善点はない	色々すべて有意義な時間だった	とても有意義な時間だった。
	地域の方に話を聞きよ学びになった	B町の地域の方にお話を聞く機会はそうそうないのでとてもいい学びになった。
	コミュニケーション能力がついた	人前で発表したり、人に物事を伝える力、コミュニケーション能力はついたように思えた。
	プレゼン能力が培われた	とても楽しく、話す力やプレゼンの能力は培われたと思う。
	実習の流れや時間配分は適切であった	実施の時間やグループワークなどの時間も適切であった。
改善点はない	特にない。	

7) 実習の感想・意見

実習全体の感想や意見について、自由記載で回答を求めた結果を表4に示した。「人々の暮らしを理解する大切さを学んだ」、「人々の暮らしを理解することは看護に必要な視点であることが理解できた」、「地域や季節が異なることで人々の暮らしが違うことが実感できた」といった内容の記載があった。

IV. 考察

1. 実習の成果

学生へのアンケートの結果、実習内容の評価は、「看護分野や関連する分野への関心が広がる実習だった」や「価値のある実習だった」の2項目で、「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した学生は96%を占めた。さらに、実習を通じて達成・修得した事柄や実習を通じて得た思いのうち、「実習の目的・目標を達成できた」、「新しい知識、考え方、技能を修得でき、さらに勉強したくなった」の2項目で、97%以上の学生が「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した。これらのことから、多くの学生が本実習の目的・目標を達成し、実習を通じて、人々の暮らしを理解する意義を見出し、看護を含む関連分野への関心を広げ、学習意欲を喚起する成果があったと考えられる。

本実習では、「1) 看護の初学時に地域の人々と交流することにより、高い倫理観と豊かな人間性をベースにしたケアマインドを身につける」を目標とし、地域の人々との交流を通して、様々な暮らしや価値観があり、それらを尊重できることを目指している。

実習を通じて得られた自身の思いについて、「住民など他者と交流することが楽しいと感じられた」、「地域に向いて学習することが楽しいと感じられた」の2項目で「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した学生は、96%であった。本実習のプログラムには、①地区踏査、②地域の人々による講話、③地域の人々への暮らしのインタビュー、④実習報告会およびディスカッションで構成されている。そのため、入学後、教養科目が多い中、1年次での初めての实習体験であり、地域の人々から直に話を聞き、地域に向いて学生自身の五感を使って学ぶことに楽しさを感じられる実習であったと考えられる。

実習の感想・意見では、「地域に向いて実習する機会は良かった」をはじめ、「その人を理解するためには生活や健康および地域を知ることが必要であることが理解できた」という記載がみられた。学生は、実習の協力者である地域の人々を「暮らしている人」として理解する視点を学び、暮らしの背後にある「地域」への関心を高めていたことが推察された。これは、実習の目標である「3) 人々の多様な生活、地域の環境、価値観、歴史にふれ、人々の生活を理解するために必要な視点を幅広く学ぶ」に関連付けられた成果であると捉えることができ、看護職として人々の暮らしを理解するための基盤となる視点を涵養するために、重要な実習体験であったと考えられた。アンケート結果からも、実習を通じて得られた自身の思いについて、「人々の暮らしを知ることが大切だと感じられた」の1項目で「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した学生は98%以上であった。また、学生の実習

表4 実習の感想・意見

カテゴリー名	記載内容の例
実習で実際に話を聞いたからこそ理解できた暮らしを感じることができた	出会った方々の暮らしが、教科書のように文字だけで書かれていたら理解できなかったと思うが、実習で実際に話を聞いて暮らしを感じる事ができたので、すごく意味のある実習となった。
人々の暮らしを理解する大切さを学んだ	人々の暮らしを理解することがとても大切で、生活の根本には暮らしがあることを学んだ。
人々の生活や健康は個々により多様であることが理解できた	様々な人の生活や健康を知ること、その人を理解するためにはこれらのことをよく知ることが必要であり、それは個々で多様であるとわかった。
人々の暮らしを理解することは看護に必要な視点であることが理解できた	地域の人の暮らしを知ることは看護師になっても必要な視点だと感じた。 この実習を行わないと得られなかった暮らしの視点がたくさんあると思うし、このような機会は必ず看護において役に立つことだと思うので良かったと思う。
その人を理解するためには生活や健康および地域を知ることが必要であることが理解できた	様々な人の生活や健康を知ること、その人を理解するためにはこれらのことをよく知ることが必要であり、それは個々で多様であるとわかった。 この実習を行わなかったら、地域のことを知りたいと思わなかった。地域のことを知ることによってその人を知る糸口になるということを考えさせられた。
人々の暮らしは健康につながっていることを学んだ	この実習を通して、暮らしを理解することは、人々の健康など様々なことにつながっていることを学ぶことができた。
地域に向いて実習する機会は良かった	様々な地域に実習に行けることは良かった。
地域や季節が異なることで人々の暮らしが違うことが実感できた	初めて実習を行いました、地域に対する思いや、地域環境などがそれぞれの場所で異なるということを学ぶことができた。また、夏と冬で、どのように違いがあるのかも知ることができた。 他の地域と比べることができて、人々の暮らしの違いが実感できた。
グループワークを通して楽しく学ぶことができた	グループワークがメインで楽しく学べた。

の感想・意見から、「人々の生活や健康は個々により多様であることが理解できた」、「人々の暮らしを理解することは看護に必要な視点であることが理解できた」、「地域や季節が異なることで人々の暮らしが違うことが実感できた」という学びが挙げられていた。これらのことから、地域の人々から直に話を聞き、夏季と冬季に同じ地域に出向いて、1年を通じた暮らしを学ぶことの意義を学生が実感できる成果であったと考えられる。

実習の改善点として、学生は、「地域の方の話をもっと聞きたい」、「柔軟な対話ができるような準備をしたい」、「自分の実習エリア以外の地域にも行くと違う気づきを得られる」という意見を挙げていた。本実習を行うことによって、地域の人々から暮らしについて学びたいという動機が高まったことに加え、実習報告会において、実習地域が異なるグループの学びを共有し、地域による暮らしの違いを知り、他地域への関心が増した成果があったと考えられる。

実習の目標である「2) 対人援助に必要な信頼関係を築くために必要なコミュニケーション能力を高めることができる」は、地域の人々による講話、地域の人々への暮らしのインタビュー、ディスカッション及びグループワークを通じて達成することを目指している。実習を通じて達成・修得した事柄では、「実習前と比べて他者とのコミュニケーション能力がついた」、「実習前と比べてグループで活動する力が養われた」の2項目で「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した学生は96%以上であった。実習の改善点では、改善点はないと回答をしながら、「コミュニケーション能力がついた」「プレゼン能力が培われた」との記載がみられ、学生の主観として、コミュニケーション、グループワーク、プレゼンテーションの能力向上を実感できる実習の成果であったと考えられる。

また、「グループで活動することが楽しいと感じられた」という項目で「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した学生は97%に及んだ。この結果は、高校までは多様な職業志向をもつ集団の中で学習する環境にあるが、大学で看護職という専門職をともに志し、学ぶ動機を共有できる仲間とディスカッションし、学び合う実習を通して、楽しさを感じられた体験であったと推察された。

これらのことから、初学時の学生は、本実習における人々の暮らしを理解するプロセスを通じて、認知・情意・精神運動領域のすべての目標が含まれている実習目標を関連付けて学び合い、看護職に求められる信頼関係を構築するためのコミュニケーション能力、高い倫理観と豊かな人間性をベースにしたケアマインドを身につけるための基盤を構築する成果があったと考えられる。

本実習での学びは、看護の対象は「暮らしている人」

であることを理解し、その暮らしを理解することは、「病気をもつ患者」というだけの人ではない、今まで暮らしてきた日々があり、これからも暮らしていく人であることを踏まえた看護実践につながる(島田, 2022, p.12)。本実習の成果が2年次以降の領域別実習における看護の実践にいかされることが期待できる。

2. 実習の課題

学生が回答した改善点では、実習全体を通じた学びの視点、実習プログラムや運営、ワークシートにすることが挙げられた。学生が記載した実習の感想・意見では、本実習により、「人々の暮らしを理解することは看護に必要な視点であることが理解できた」と回答した学生がいた一方で、実習全体を通じた学びの視点に関連した改善点では「看護に関連することを学びたかった」という記載がみられた。本学科では、1年次の前期科目において、学生は看護学原論を学修している。この科目で学修する看護学を構成する中心概念である「人間」、「健康」、「環境」、「看護」は、本実習の暮らしを構成する要素と重なる内容であり、学生にとっては重要なレディネスの一つとなる。初年次であるため、既修の授業科目は限られるが、本実習の動機づけとして、学生がもつ知識や学びを活用して実習ができるような働きかけが必要である。

実習プログラムに関する改善点では、地区踏査や人々の話を聞く、グループワーク、実習報告会・ディスカッションに対する記載があった。本実習では、夏季および冬季に実習を行い、1年を通じた人々の暮らしを理解することを目標としている。夏季と冬季の実習において、できる限り同じ地域住民から話を聞くことができるように調整しているものの、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の影響や実習協力者の事情により難しい状況も生じた。そのため、夏季と冬季に違う地区の住民に話を聞いたグループの学生は地区踏査の場所も異なり、「夏と冬で同じ地域を地区踏査すると比較しやすい」という改善点を挙げた可能性が考えられる。報告会・ディスカッションの改善点として、「報告会後のディスカッションは違うグループと意見交換したい」や「暮らしと健康というテーマの他にも話し合いたい」という内容の記載から、学生は自身が実習で体験したことをもとに、多様な視点で学びを得たいという思いを抱いていることが推察される。体験学習では、学生が問いを立てる機会が多くあり、周囲の話の聞いたり自身の意見を述べたりすることにより、一定の結論を出す活動を繰り返している(竹中, 2019, p.150)。今後も、多様な人々の暮らしの場における生活を理解するために必要な視点について、学生が自律的に考え、幅広く理解することができるよう、実習方法の検討を重ねていく必要がある。

実習運営に関する改善点では、実習内容や時間配分、実習時の移動、実習にかかる自己負担について記載がみられた。アンケート結果の「実習プログラムの時間配分は適切だった」という項目では、「全くそう思わない」もしくは「そう思わない」という回答が14%であった。加えて、アンケートの自由記載では、「時間配分を見直してほしい」や「時間が余ることが多かった」などの内容がみられた。今回のアンケートは、実習全体を通じた時間配分の適切さを尋ねた項目で、プログラム別には尋ねてはいないが、各プログラムの時間配分は検討すべき課題の一つである。実習内容に見合った時間配分であったか、また、課題への取り組みは十分であったか等を評価し、次年度の実習プログラムの時間配分を検討していくことが必要である。実習運営に関する改善点として、実習時の学生の移動手段や悪天候時の対応が挙げられた。本実習では、JRの駅から徒歩では移動できない地区の住民にも実習協力を得ている。学生はコミュニティーバスを利用し、実習場所まで移動するが、バスの便数が限られ、冬季の実習では悪天候による運休も生じる。しかし、このような地域での実習により、都市部では学び得ない農村部や山村部に住む人々に特徴的な生活環境や暮らしぶり、価値観にふれ、生活環境と調和しながら自らの健康をどのように維持しているかを学ぶことは、看護の対象への理解を深める（大澤・鈴木・塩ノ谷他、2012）。学生の安全をより一層確保した上で実習を行うことが今後の課題である。

ワークシートの改善点では、「内容は実習目標を達成するために効果的だった」という項目で、「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した学生は95%であった。一方で、「記載しやすかった」という項目に「全くそう思わない」もしくは「そう思わない」と回答した学生は16%を占めた。学生が記載した改善点の内容をみると、「ワークシートに書く内容を具体的に示してほしい」という記載があり、学生にとっては、ワークシートに挙げている項目・内容の一部は抽象的であり、地域住民に聞いた話の内容をどのように整理して記載するのか理解が難しい可能性が示唆された。具体的な出来事を抽象化したり、抽象化した概念を実際に活用したりすることは、高度な認知能力を必要とする（内藤・山下、2019, p.68）。本実習を履修している学生は1年生の初学者であり、ワークシートに挙げる項目・内容と実習で見聞きした具体的な内容とを行き来しながら考え、ワークシートに言語化するための支援が必要であると考えられた。今後は、ワークシートの項目・内容を見直し、記載例を提示することやワークシートに言語化する際に学生の理解を促す働きかけをすることが重要である。学生が記載した「実習エリアや実習内容にあわせたワークシートだと書きやすい」という改善点についても、これらの対応によ

り、ワークシートへの記載のしやすさが改善できると期待される。

新カリキュラム導入後、初年度における本実習の成果と課題を踏まえて、次年度以降の実習を検討していきたいと考える。

謝辞

本実習の実施にあたり、ご協力いただきました実習機関・組織の皆様、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。また、調査にご協力いただきました看護学科の学生の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は、北海道医療大学看護福祉学部学会第19回学術大会において発表した内容に加筆・修正したものである。

本研究に関して、開示すべきCOIはない。

文献

- 厚生労働省 (2019). 看護基礎教育報告書, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2023.11.12)
- 文部科学省初等中等教育長, 文部科学省高等教育局長, 厚生労働省医政局長通知 (2020).
保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令の公布について,
<https://www.mhlw.go.jp/hourei/doc/tsuchi/T201105G0020.pdf> (2023.11.12)
- 内藤知佐子・山下奈緒子 (2019). 看護教育実践シリーズ5 体験学習の展開. 68-72, 医学書院, 東京.
- 大澤真奈美・鈴木美雪・塩ノ谷朱美・飯田苗恵, 原美弥子, 齋藤基 (2012). 山村における地域看護学実習の学習成果—対象理解の視野拡大を目指す学習活動の意義—. 群馬県立県民健康科学大学紀要, 7, 35-44.
- 島田 恵 (2022). 第1章人々の暮らしと地域・在宅看護. 系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護の基盤 地域・在宅看護論1, 12, 医学書院, 東京.
- 竹中喜一 (2019). 看護教育実践シリーズ5 体験学習の展開. 150-152, 医学書院, 東京.

受付：2023年11月15日

受理：2024年3月5日